

# 多文化共生を目指して

ブラジル人の住民が急増している地域にあって、入園する子ども達の中でも、ブラジル人の子どもの占める割合も併せて大きくなりつつあり、全体の約3割を占めるまでになっている。やはり、言葉の壁から生じる問題が多く生じ、日本人とブラジル人の子ども達が、お互いを理解しあい助け合う環境を作る必要があった。言葉の理解に応じて保育方法を変える等、丁寧な保育を行うことで、言葉の壁を乗り越えた自然な雰囲気を作り出すことを心がけ、多文化共生の輪を広げていくことを目的としている。

社会福祉法人 **聖隷福祉事業団** 〒438-0039 静岡県磐田市東新町2-11-13  
TEL : 0538-35-8567 / FAX : 0538-21-1010

## ◆ 法人の概要

法人設立年：昭和5年  
経営施設、事業（数）：84施設

## ◆ 法人の理念・経営方針

キリスト教精神に基づく「隣人愛」～自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい～

聖隷福祉事業団職員「聖隷人」の使命

- いのちのと尊厳のために  
わたしたちは、ひとりひとりのいのちと個人の尊厳を守ることを、第一とします。
- 利用される人々のために  
わたしたちは、サービスを求めるすべての人々に、誠実かつ献身的に仕え、その自立を支援します。
- 地域社会とともに  
わたしたちは、保健・医療・福祉・介護サービスを通して社会に貢献し、地域の人々との強い絆を育みます。
- 未来を築く  
わたしたちは、創立以来の先駆的・開拓的精神を受け継ぎ、常に新しい課題に挑戦します。
- 最高のものを  
わたしたちは、ひとりひとりが専門職としての倫理と誇りをもち、謙虚な姿勢で最善を尽くします。

## ◆ 実施施設の概要

施設名：このとり東保育園  
施設種別：保育所 90名  
活動開始年：平成10年4月  
活動の頻度・時間：日常  
活動の対象者：外国人（ブラジル人）

## 活動実施の背景、実施にいたった理由

当園には、10年前からブラジル人の子どもが毎年10人前後入園していたが、5～6年前から園に隣接した団地でブラジル人の住民が急増した事で、園への入園希望が急激に増えることとなった。

当園の定員は90人あるが、その内でブラジル人の子ども達がここ数年は30人前後と、全体の約3割を占めている。そのため、ブラジル人の子ども同士のコミュニティができてしまい、言葉の壁から生じる多くの問題を抱えてしまった。乳児で入園すると日本語を覚えるのも早く、集団への適応もスムーズである。しかし、幼児（4・5歳児）からの入園となると、言葉を理解し、仲間入りができるまでにするには、保育士の働きかけにかなりのエネルギーを必要とする。また、地域のニーズに従い公立小学校へ通う子ども達30名位の学童保育事業を実施しているが、その内の約5割はブラジル人の子どもを受け入れている。ブラジル人の保護者は家で宿題を見られないので、保護者の依頼で学童担当が毎日面倒を見ており、その学習指導もほぼ1対1で行わなければならない。

当園の取り組みは、日本人とブラジル人の子ども達が、お互いを理解しあい助け合う環境を作る必要を強く感じたことにより始めたものである。

## 実施内容

上述のような問題が浮上するまでは、当園は従来通りの歳児型保育を行っていたのである。年齢は達していても言葉の理解が出来ない状況で、同年齢のクラスに仲間入りをしても言葉の壁から保育の内容が解らず、居場所を失った子達の問題行動が続いてしまった。

人数が多くなると集団心理が加わり、保育士を悩ませるような喧嘩やいたずらも頻繁に起こる日々であった。現在に至るまでの試行錯誤の連続の中で、一人ひとりが主体的に遊びを選択できるコーナー遊びを生み出す事で、言葉の理解ができなくてもスムーズに仲間入りできる遊びの場と、歳児で分けない自由な遊びの空間を作ったのである。それぞれの保育

士が持っている特技や個性を発揮できるコーナー保育を主とし、加えて子どもの育ちに大切な同年齢同士の遊びの場を設けた。言葉の理解に応じてブラジル人の子どもだけを集め、ブラジルの絵本を読んだりした。遊びの際の大切なルールは、通訳がポルトガル語で伝え徹底するなど、噛み砕いた丁寧な保育を繰り広げたのである。

自由な保育形態の中には、言葉の壁を乗り越え自然な雰囲気での多文化共生の輪が広がっていったのである。

## 活動効果

新たな保育スタイルを打ち出し3年経ったが、この間日本人の保護者から質問や疑問反論も多くあった。そのたびに懇談会等で、趣旨や効果について説明し、理解を求めて来た。また、一日保育参加を積極的に勧め、今地域の中で人間関係の希薄さが叫ばれている状況がある中、いろいろな子が関わりあって育つ事の素晴らしさを理解していただけた。あわせて、ブラジル人の保護者も、我が子の成長を感じると共に、日本語も覚え日本で子育てしながら生活していくことの楽しさを覚え、さらに日本社会のルールもマスターできたのである。

また、地域への理解という点では、園の隣の公園で開催する夏祭り・運動会・バザー等をポスターで呼びかけ参加してもらうことで、外国人の子どもと日本人の子どもが自然な雰囲気の中で共生し合っている様子を知っていただくことができた。そして今年の5月には、多文化共生に関心を示している教育関係者からの要請に応え、日頃の取り組みを発表した。その場には、約100名を越える人々の参加があったほどである。その状況は、静岡新聞やテレビ静岡でもとりあげられ、テレビ静岡においてはスーパーニュース内の特集「子どもと未来」で放映されたのである。一方、ブラジルの新聞社でも、日本の施設が日本の中で少数派となる外国人の子ども達の成長に思いを寄せ、日々汗を流している事に対して感謝の気持ちを掲載してくれたのである。このような多くの反響に職員も驚いている次第である。

## 今後の課題

日本には、現在約31万人のブラジル人が居住しており、そのうちの1割以上が静岡県の西部地区

に居住している。静岡県の調査によると、4人の内の3人は、定住志向が明確化しているそうである。現に、当園のブラジル人の保護者も、昨年度5つの家庭でマイホームを購入された。この様に、当園のある地域では、ブラジル人家庭が隣に住むことも当たり前の時代が、遠くない将来やってくるように思う。

このような状況から考えると、日本社会全体で、現在の教育に関する問題について、抜本的な解決策を見出していく必要性を感じる。つまり、乳幼児期の言葉の教育にしっかりと目を向けていく事が、将来の日本社会にとって非常に大事なことであり、その先に明るい未来があるといっても過言ではないと思う。外国人の子ども達が、10年後15年後に日本社会で活躍していくためには、親が子どもの教育について関心を持ち、子どもが将来に希望を描ける環境が必要だと考える。乳幼児期に自然な形での多文化共生を経験する事の大切さを、これからも訴え続けていきたいと思っている。

